

「そんなこと、どっちでもOKでしょ」という人も多いのかと思いますが、新聞用語では「氷が溶ける」「氷が解ける」は区別して使用しています。弊社では「氷が解ける」です。一般記事で「氷が溶ける」という表現が出てきたら、「溶」を「解」に変えて「氷が解ける」に直しています。

弊社の用字用語集「産経ハンドブック」では、

「解かす・解く・解ける」＝とけてなくなる、緊張がゆるむ、ほぐす。(用例) 氷・雪が解ける〈自然現象〉

「溶かす・溶く・溶ける」＝とけ合う、固体を液体にする。(用例) 氷・鉄・雪を溶かすと、使い分けています。

なるほど。自然現象…か。暖かくて氷が自然にとけ出して水になってしまうような場合は「解ける」なのか。「氷解」という言葉もあるし。

一方、お湯やバーナーなどで急速に氷をとかすようなとき、つまり人為的に氷をとかす場合は「溶かす」なのか。

ん？ 「溶ける」ではなく「溶かす」と書いてある。ということは…。自動詞ではなくて、他動詞ということか。おおむね、そう区別して覚えれば、いいのか。改めて産経ハンドブックを見て、考え込んでしまった。

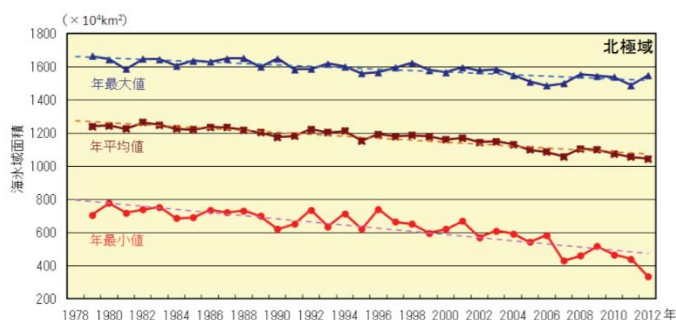
「氷・雪」の場合は、自動詞・他動詞で区別することは分かった。「鉄」は「溶かす」の用例に書いてあるけど「解かす」の方には書いてないもん。なるほど、鉄は自然にはとけない、ということか。納得、納得。

「字源」簡野道明（角川書店、大正11年）年によると、

まず、驚くべきことに氷という字は俗字であって、冰が正字であるとあります。

そして、解は物が自然に解け散る、がその意味でしょうか。解を説明するのに解の字が入っているのがなんとなく気になりますが。現代流の化学の言葉を引用すると、解離などがそれで、物理的なニュアンスが入ってきます。融は、固体が液状になるとあり、こちらのほうが私にはしっくりときます。

さて、問題の北極海の氷の面積は一年間を通して大きく変動するのですね。その年間の変化の状況と、氷の面積の年次変化の様子は次のWebを見るとわかります。北極海の氷の面積は年々減少し、南極の氷の面積はそれほどには変化していないようです。



https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/data/shindan/sougou/pdf_vol2/1_3_1_vol2.pdf